芋かしら
完

其序

沖に弄月の才はあめり風もするとふま
乃葉ちりて手撚り月の船あそび毛し
吉す可家良茶の倫り可喰食毛無遍ふ
色及ゝ才なむとんと下手の大たれはして
かの判官乃あつめてあまや似寄らし
かくて衣も物け無く毛つきぬる比あるよ

此房かくし書るいもかし程をぬけ出て
一句序破の法を定るは盛亭の主人
丸焼とて落葉衣の作者とそ聞
まされは菴主ルニてし句は詞を続きてや
楊枝まて添えまさる

享保十一丙午 やよひ日

隣新下 桃柱稿

むし焼や落葉衣のいもかしら　新深 七里

時雨をも笠にいれ云東西　京入道 一宇

須弥の爐に添こも投る拵めて　仝 百阿

明残る残るをみな口傳なり　仝 范字

なく音には判をつかく歎にとめ　仝 素六

数寄屋はおねくさもとら茶きさい　仝 吾由

くれ笹にあめてくれぬの月の歌　仝 山只

遊ぶにも島もつるゝ　仝 柏巳

此房にかゝる事いまだ題をぬきにして
一句序破の法を定る遊亭の主人
丸焼にとて落葉衣の作者とぞなれ
まさば菴主にして句に詞をはきてやそ
揚杖にそ　読ませきされ

享保十二未のとし
やよひ日

隣翁下
桃桂稿

むし焼や落葉衣のいもがら　新深 七里

時雨を筆にいれ去東西　一字

須弥の端に添こそ枚子将ぬて　京入道 百阿

明康ひる康をみな口傳なり　仝 范享

なくさまに判をとかく歌にとの　仝 素六

数寄屋ハおねとさとり茶きてひ　仝 吾由

くゐ笹にそれめて仮との月の秋　仝 山只

遊ぶ心に鳥もわくるか　仝 柏巳

負をハとらぬ相撲ニ勝て居て
羽織着てくる出家の百姓
草ふきか茂の木すりのおそき煙
ねむりさそひに合歓の花ちる
責てやる牛も名残の貝吹て
葛屋の軒のすたれて土濡
銭店に二男ヶ通ふ門の隈
廣ひ世界にはたちとりして

但馬 李仲
長崎 路圭
大津 玄琵
仝 円入
仝 寡陀
膳所 昌房
仝 酒堂
近江 佐角

手入せぬ木も萩のまかきにて
娘ばかりハ十六夜乃月
肌寒き律違の膳見の一言筆
湯治ハ遠慮せぬて養生
咲かえる山ハ訓染の暮に鳥
日をしるされて蛇上
三ヲ
もかりの襷ますそはの損かけて
潜にハ骨のおれぬ寒潮

仝 冠那
江戸 千梅
四日市 玉之
桑名 此若
仝 午潮
仝 里川
仝 左付
仝 箕三

赤飯に拳の腹をなでけり
　足の未れ隠は墨る分別
かゆくの谷しも今ハ畑
　子たちもありく朔日の礼
木履てきうそ大ふ〜き雨あり
　義とハいとはゞ田楽
新田ふ寺ハおいかと松をふた
　鷹部の風をあてる桐楼

名古屋 昇角
仝 師冬
仝 丁牧
仝 竹夜
仝 巴席
仝 左把
仝 麦士
濃州岐阜 童平

稽古けて襟にちんたいそう
　全仏の笑ひともてふ店先
盆の月看経くさきおあり
　桐も梯もまろ三ツ二畳
かゝ寫にお色りのかは秋の雨
　嫁しか嘴もいへておりしい
庚申ハ何もきゞ猿ぬ入きるあて
　其人見にはたかて茂て精進

獅子門 白狂
長良 有琴
越前府中 嵐枝
仝 梯穀
仝 帰酌
福井 葦吹
三国 眠嚢
仝 播東

おそ付とハ未れのま廊を入ま
仝 佐北

おぬ別れの夢まよ儚ま
仝 歴角

志りてきんは表の鳥とも
加州大正寺 馬泉

帆まちつくりと見ゆる八景
小松 朴人

養父へま来てハ二階て春を延
仝 左静

遺ひをとりの多ハきれし
松任女 千代

ひさとはく帰まて月をかへる
金沢 山隣

去債まするむ須広の逗留
仝 曽及

商よ花待事もむまひと一
仝 岐昌

神午の日も雪ハちらし
仝 丈志

昨ハ了し娘のむ差を見てひやう
仝 知角

いせて気けて肴やり嘘
仝會 素然

毛ち米の廣い城下よ賣きれて
仝 沂青

置もこる橋よゆく年
仝 生可

隙てみれば時も鳶帽子を社人達
仝 侶鴟

かけてあらしえ打ぬ双六
仝 風曲

吸ものを見つけてちよつとせいと成も　仝　舎衆
なまめく魔鬼にかきとめ顔　仝　亀町
折ふしまゐの使にきのあはれて　仝　禹洸
わこりの跡乃たゆる白粉　仝　左菜
石壇乃破を金不よあまかり　仝　希田
鯛乃目れ木の間そよし　仝　尓来
そのうち色雨も遠し月の色　仝安　紫仙
さびては節ハ庭園白りん　仝　野角

あいさ川も寂しのんきに角ハ形　濃北方　里紅
うつむく顔のままに居眠る　越中不動　彝従
気合れ樽にまつる山お話し　仝　更酋
細きけふりの煮鍋さびしき　仝　寺監
野またちるき霊うかいそく冬構　仝　可有
木情にますふてちよそ十年　仝　眉泉
仕事を急でゐにはてつまひ　富山　二川
振舞の日ハ待ちぬるまひ　仝　一酉

水うてば庭の暑さの日すゞし　仝 沙鳥

竹の葉ゆらゆらの手つたひ　仝 一庸

色ちれるをまよなきして待腰　仝 倚菊

宮はよくつきるお内義　仝 白推

今悄もまだ灯ともし比の軒の花　仝 雋雪

長閑に鳥の声もくるしき　仝 秋巷

雪汁を待てや嵯峨の筏船　仝 閭叉

山のたゞまは一万日の昼　魚津 耕雨

かゝる就馳走に出世は賭けり　仝 大凡

茶子はあつひも一手つ咲　仝 倚彦

疱やましくふより障子明きひ　仝 季布

蒔絵をそ入せてかくすゑ霜　泊 巴周

あてまみ妾を程与る大工とて　仝 松宇

火の番は嗅ぬ霜の銅宅　仝 杵丁

魟のきゝつ沖も静まゐ鱈としき　仝 雋兮

猿おもしろき法性寺笠　越後糸魚川 寛陽

芋魁之詞

芋頭叟　蕉遊

むかしも猿寺の惟山和尚ハ馬に乗せよいも
からひ焼残るよし禅僧の酒肴ハ西
白ふれて殺風景の異名ハ有之れかし
中比清貧しの吉奈院ハ書生吟友あれハ
綸に及つて今や露柏庵かいかし只ハ
蓬亭の七星に調せられて世にいもきあつ
きの風味を喜びて蒔翠衣の名に記く
きりさるまにて集の撰者清明ハ芋を
ゆくをもそりする山芋のさひよあてや
蕉遊ニかくし名をもてかりて蕉山
の嫁となりよりて七月の名月
芋の汁なる哉

妹との名の
　月まつこよし
　　いもかしら

乳草頭　井童平

春のあさまだてきれいに
新芽を採る歌をうたふとき
子草に何よりん乃やさも
名さへ三五の月にもしきり

詠四時閑居　露桂庵

三なきる水を春のおろうり
夏を立る雲の峯なそあやし
月とていもの気に倚せて
雪に圍炉裏乃鴨をさひしき

懐　露桂菴之山居　滄吾仲

露をはらの艸乃尾をおさへ尾
世に花鳥の諸は忘れて
雨乃庵山も月乃廬山　毛
酒すまして芋かららしや

春

梅か香にのつと日の出る山路哉　芭蕉翁

田の畔や柳の尻ゆく月のおと　野坡

草もえて子鳥や世をなる一造化　呂房

風呂敷に落んばかりの嶋ひとつ　惟然

梨の花咲や照る日をうしろ顔　百阿

寒い世をぬくぬくに柵の若芽哉　鶯洲

春の日に汁を流して金字哉　一守

咲揃の裾より低く啼てゐる　此桂

出かゝりや猫抱あけて戸を明よひ　慈竹

およぎぬもあり鶯のなく音は日　富山僧　一堂

鶯やかゝんて起は竹の雪　三国　揩東

うくひすや筍をひろて鳴と鳴　一丁

鶯や春の朔日に名乗けり　加茂　二扇

うくひすや都を離て志賀の里　五泉　一雨

鶯や我か国の訛てまてよ歸　ヲハリ　拈卜

鶯は啼て起乃あけぬ柳かれ　加州　梨兄

むめか香をとめて紙子は仕舞かな　乙由

宂市乃借道を掃やむめの花　長サキ　路芝

白糯を取くある后や家の梅　金沢　山隣

うそくさき木ての庭藝や梅の花　木兆

梅か香乃軒によとむや朔　星雲　加賀女　亘偲

上下ハ梯よかゝしむめの花　泊　里童

梅か香は夕日をとてつよ篤かな　朽尾　隨宜

やまの紀乃鼻を征ちきり梅の花　富山 鳶雪
梅か香やいつの鐘も下戸ぐるし　五泉 芦山
むめちるやその木陰なる雪の上　トヤマ 有節
紅梅は春毒をかける入日かな　巻 一睡
春はなれてこゝろの里や梅の□　奥津 曽六
やり羽子やりつれて娘か腰　ソホク
賣けりや背乃長者の賣屋敷　巻 暮雨
枯芝の實ともなく花もなく　金沢 蘿守

春日野を夢の世すき日遊菜か　竹鳳
夕月の出しぬけにすり春日かな　信州
春の日を牛は来るゝゝかな　山市
幾をまう去年の顔なり梅の花　巣圓
折ましき花の袋やうかれ猫　鷗笑
山の戸は明くや蕨乃初まより　岩船 濠蛙
鼻ならひや筋出く繁る谷の雪　巻 里桃
角榴張やひろふて来る百太郎　羽州女年 葉夕

行春の雲見て居る雲雀哉　尾州 三遷

かゝる身の音に松しやみひえり　長ずき 安和

雲雀なく空のはてや麦の霜　臼井 吟之

野の晴ま牛も顔干れひくらん　可及

月の夜の火ぬり見えぬ燈哉　臼井 志芦

春雨やまるし蝶の身のほど　金沢 北枝

生花やぬれ羽の蝶乃雨やどり　石動 子川

菜の花やられしさはむ蝶の知　冨山 二川

菜の花や乳房に蝶や泣ねいり　武門 梅蝶

なの華や風にゆするや蛇の声　一守

蝶しや花をたづねて竹の間　福居 葦吹

鶴らいあるて蝶にあらし哉　泊 芦情

蝶しやこそりあちく一あし　尾州 左把

春の雪尻りむきぬ柳かれ　長良 洵楓

春うら風に身を委ねる耕哉　米僧 楚石

春雨の裾にあしするやちなきる　仝 其滴

青柳の氣に入りや春の雨　金沢 沂青

城あとの姥をうはそて柳かな　冬 上敬

むく起の目にとりさかす柳かな　長崎 一帆

一節はたえ毛のなき柳かな　松尾 嗽石

乱れ乾の蝶噛りしよき柳かな　石動 何有

雨風にあらそはぬ柳かな　押角 三思

青柳や瀬をわける鯉の泡　長崎 禾堤

椿から香さとおきて柳かな　金沢 八子

方丈の依竟かかりて柳かな　五泉 蒼霄

春風の唯たゆれぬ柳かな　本吉 君推

投出して深きに深き柳かな　〃 桃風

行しさ瀬にはかりしき柳かな　石動 左菊

茅の花に春の尾をひく入日かな　金沢 生可

菜の花や山きとの夕雨哉　ミノ 野航

鬼あざみ情きむと咲ありし　京 吾由

花のも似ぬ花のすかたや鬼あざみ　女 松月

名ゐの山もりちり涅槃像　ヲハリ 巴雀

咲かゝれを鳥の見せる椿かな　岐阜 沼山坊

隣もとみまちふさゝやちり椿　有隣

晩鐘におもひ出てやちる椿　羽州 只白

針の手は世話さう為るつむぎ哉　巻 瑞翹

手の届くところハ咲て椿かな　摂越 千尺

うつむかぬ椿も花をかくしける　奥津 倚凌

あてられ顔や椿のひとつ咲　平加 其風

沙汰なしに椿咲けり藪の奥　金沢 左連

墨つまり筆に残すや赤ながき　トヤマ 夏橋

香をとめず有し嬉し椛の花　一榮

ひよどりの花に籬相ある雨かな　村杢 嘿白

山寺や花は百部の経の数　福居 山流

もちりてうつる硯の水かな　加茂久年 杏扇

近なに戻して媚さく火燵哉　摂越 一字

夕されの櫁も星に眺めつる哉　佐涼

虚空ハ尺せぬ朧のけしきかな　奥津 巴周

萼解て風にちり急山櫻　ミノ 東羽

雨の日や遠寺の鐘に初けり　波上 和勢

氣物の北側に山乃さかりかな　岩船 愚席

餅蒸て老ゆく人や山さくら　曽根 和凧

湖を見て里に出る田打かな　ヨクリ 以之

錦なるや端にちりこむ春の雨　長良 有琴

大根の辛味やぬけておぼろ月　笠松 達支

岩藤や波とハいまだ及ばず　富山 一膚

苗代の水口寒し雨の泡　粂 南水

帰るとて一しもきほふる水かゝミ　小松 朴人

鵜飼のきゝ離まもありく汐干かな　尾州 麥士

着て臼に女ちらや蓬もち　岐阜 量平

大文字に硯の海乃汐干かな　糸魚川 守高

ものいはぬ火入て拝む雛買　仝 菟陽

口紅粉のそ移うつし恋の色　仝 虎勢

夏

すてゝ母は野にはけし晒哉　蓮二房

青柴を鮫屋にはるや矢瀬小原　去来

麦秋や大きな家の二階住　浪化

一夜乃暑しはらしや白牡丹　木因

水無月もさそれ髪の柳哉　七尾　七里

ひとぬきや男子夫婦へあん内とり　一宇

単衣のきそてもまし更衣　金沢　亀町

手遊乃まゝをたゝむや更衣　山泉　洞池

春夏の座をきて涼し更衣　石瀬　梅月

蝶乃羽取風のあふるや更衣　石動　方堅

夏の日は書くりはきゝ菊哉　亀田　之風

郷隣々照りはきゝる霞哉　七尾　荷丁

罰江よ夕日残はむなかん飛　金沢　安志

蜂も鉈もひとつ蓮の牡丹哉　富山　紋蒼

蝶もとまるての付るわらへ小　七尾　長羽

竹の子乃ひとつ無事や屏の中　蘇守

竹の子はいのちなし垣の外　乃井 越雪

笹の子は家はかくや蝸牛　白井 志芦

皇描は閑とて畑や蚊喰鳥　天野 岐童

みしか夜や浮世の長の恋ごゝろ　金沢 非亮

立と居る人は堂の夜市かな　七尾 司鄒

冷香扇は前の音くもるかな　大平寺 友現

笑かけに置き楽屋の笑ひかな　金沢 手哉

ちくさいな人見る比や初なまひ　雲枝

年よりの子は利口なり初茄子　清洲 桃川

鴨やきれ羽あつめてやとつなまひ　尾州 柳笠

咲かけて朔日をまつや百合の花　文堂

青梅や網庭もまるかくし喰　鱗風

蚊屋の紋うつや前後の青海波　梅蝶

手まねる山の響きや蚊屋の月　ツルガ 東惣

青しも花夜は出てわり紙帳かな　季布

藻の花の浮世を廣し池のおも　笠雲 未乱

肴にも極楽もあり蓮乃葉　小方 鷹仙

濁にみを泥もうつさぬ蓮の花　皐陀

とりつきても忍ぶ音かや蟬の聲　昨嚢

花にあれは茂りゆし蟬の聲　七尾 琳石

百夜の夏ハやぶれてせミの声　魚津 山肴

うすものゝ障にもあつし蟬の声　金沢 橘甫

世の中ハ女房にとてもあつさかな　童平

出代の皺をのしたる暑さ哉　魚津 篤之

團扇さへもてはあつさの小提かな　仝 倚彦

掃除日の箒にも除ぬあつさかな　仝 巴周

背戸に出て落足えても暑かな　仝 雨村

浮雲のまけはそれるあつさかな　浜上 冨鶴

手にむすふ涼風もなき暑哉　北方 琴左

京良香扇色のえくて暑かな　岐阜 台太

せミの音も通る板屋のあつさかな　村雲 洞水

鞘豆ハ莢とび出るあつさ哉　京 書方

麦藁は簾乃青のあつさかな　泉 蒙松

振分て茶肉にあつし日盛哉　葦吹

去としの夏は猶子房をたづねて老年の
梅長者に旅寝するまかの何庵庄中に
いざなはれて長良川の鵜舟を見るにたへ
身にも似て哀なる遊覧ありし面白うて
やがてかなしきとの祖翁乃吟に似たるなれ
ども眼のあたり三十余年の旧懐を信
しるよしなきを記しく

鵜士の老く火より哀れや鵜の舞　一宇

涼さの物とる蓮のうき葉哉　乙由

月の出も夏とや雲の一字哉　七人 麟趾

登嶺や扇にのりて野雪隠　義勇

むらほや登嶺の数れ鬼情多　すワり 飛仲

ひるの間の店を仕舞ふや暮の鐘　岩瀬 雲朝

豆腐の面によさし砂の照り　馬泉

水無月や手もち無沙汰に涼み哉　高岡 亙趙

あちら向け団扇のつれに風車　里紅

冬ながや夜は日あし我侍千歳　金沢 余未

九十九夜通ふ損あり一夜鮓　虚舟

蓼も穂に出る穐ちかし一夜鮓　巳千

冬まちす人も化しをりわか裏　山市

むし干やおさなゐて笑ひゆく　九蚌

色なしやむしの嘘をおもふ上　尾州 丁牧

紅絵はいくへもつまれて清水かな　松任女 千代

青陰を摘捨てなむち清水かな　二星

雲の峯ちれて神代の山となり　曽及

播鯛や庖丁まつく雲の峯　益竹

手のとゞくあたをしろや雲の峯　金沢女 紫仙

川狩や雨のありを出てこまひ　福居 苍丈

漕ぎれて船もあまのる凉みかな　林紅

あをいでも空耳すし瀧の音　三ノ関 李仁

青嵐のあなたに白し凉舟　天笠堂 寿鶴

わか竹の風ありきけのすゝき哉　福居 之甫

迯て出る火宅もや寺の夕涼み　竹同

川音や耳うとききへ夕すゞみ　笠雲 滄臺

退劒の後りあつさり更衣　昇角

昔をやいよ〳〵廉をもれて更衣　百阿

あふひさへ余所へ流ん雲の峯　イセ 蕨秋

おの〳〵や我家も涼し夕化粧　一字

隣ても書やらえむと聞秋の風　金沢 錦角

秋

物分けて露よや隣のきりぎりす　太草

蘭菊はむるむや庵の一やまひ　尚白

盆前や竟まつ軒に杵のおと　酒堂

たぐひて秋去をつるゝて蔦の中　百阿

くさを穐竹の子みなけふも出　梅蝶

庇かりて夕顔の秋をかざり笠　鷺洲

三日月を帆にかけてもちる一ひさかる　一字

秋きや今さそあつさば捨て入る　曾及

ゆく水に魂の入るひとひとつな　加賀 暁里

御山のかうこす一葉かな　武風

うつ蝉のをりて落る一葉かな　女 清

きそとつて飯さへ庭耳に秋の色　嗽石

秋もちやのそきかはや下地窓　山只

花に落てもみちにきつや虎の角　大和 遊之

ええつ秋の手まつて去てり雲の音　離卜

あまよむ葉をちり果て構ゑ　ミノ 右範

秋ぶりや住をする屋る柳かな　始流

一ゆよき雲のあらひや秋の風　加賀 正佳

ゆり逆れ稿の一ひやや秋の風　一字

羽二重の身に暖くや秋の風　芦錐

かり間或深出次雲や秋の風　奥津 素竹

三日月や積居のすきまかり住居　和風

うさねの耳に落り窓の秋　東字

鐵（テツ）　テウナ　テウハリ　テイイ

萩咲や風のちらしみせぬうち　金沢 鳥洗
芋の葉の鐵をひくや秋の風　紫電
半分ハ老しも秋をつゝねく花哉　千瀾
前髪乃あと鐵おてるや神風　菟陽
蘇乃葉のひかり尺寸や秋の雨　妻士
長きふりんにそめつゝ日雲や秋の空　村雲女 きつ
七夕や傾城まきはかましあし　有隣
星祭やさしめすときく笹の雨　可看

星合やあけハひとりの化鏡　奥州 意蝶
て女子乃相伴もあり女七夕　府中 飯的
星毛みさは捨れ草世のひと帶　京 花字
かちさまず鷺乃浅瀬や星運び　尋吹
かきき比空ま橋あり星むかひ　依風
名をはす雲も出て飛ぶ二つ星　富山 一酉
あさ皃や市の花子の立ぬ内　白推
門の茶の明けはくあてゝ垣ね哉　本兆

蕣やまだおきぬ先も花の外　　大正寺 竹豊

あさ露やさりて久しき化粧の間　　魚津 蘭里

阿さかほやとり付たちに花一つ　　同 鱗城

竹まはのこらぬ桔梗のはな盛　　小松 女 さて

日本へ名のりかけてや唐がらし　　笠松 其由

いなつまや隔しさうな笹の風　　兼従

稲つまや我もの顔に宵の闇　　金沢 古専

稲妻を追ぬむ色や田鴫　　季布

いなつまは落しあとあり森の露　　府中 耕轍

稲妻のかよひはたえむ早稲田かな　　加茂 如水

一念三千の心とて

何ものそむまのたとりの青瓢　　秋之坊

花笠や女かちなる盆支度　　並竹

月のまつ来てある穐や高灯籠　　福居 岩之

水鶏のよそりてや蔵まつり　　東守

尓くまれし蟋蟀も今宵の声まみよ　　一空

提られて行燈にあかくやきすゝき　越中塚 其柏

只ひとりの秋の庵のむしの声　岩室 似松

すむ虫に手を切きたる蔦かな　台夫

乳を放る子とてれぬやきりぎりす　雲朝

老の目に外れてはなおありありぞ　呼風

耳うとき虫の床覚えや秋の庭　一榮

稲かりの笠にこぼるゝいなごかな　五柳

淋しさも待ては耳露の月より秋　金沢 風曲

瞳そのまゝに流るゝまでつぎて見し椛　五泉 丸子

名月や水気のたつ三井の鐘　佐角

名月や谷にあつる滝の旅鳥　長崎 嵐化

庵の音の耳に底あるきぬた哉　此柱

松風もきゝわけておちはるきぬたかな　金沢 希因

砧きく家にはぬしと恋ありし　村松 幸吟

ものひ乳に相手のかゝる砧かな　月扇

淋しさの庭をたゝくや小夜砧　雲里

松竹の声吹わける野かな　　村雲 遊鶴

代ハ老めて節よや乗出まで一人前　　泊 鴎羽

錦テれ野を稲あけのの日和かな　　岩瀬 琴耕

出かゝりや石も光え切三ヶ月　　府中 嵐枝

これもかう咲え蛇鳥も一つ室　　京 栢巳

一節の細さや月の花すゝき　　嵐七

茶摺の袖や荻まで寄るほど　　岐阜 一庸

はさ残す蟻も化粧つて野菊かな　　槐二

草萌も錦となりて花野かな　　芝山 楚耕

蔓咲て二日の園よ園を卿し　　一字

諸白の山水あまし菊の花　　風草

との鬢ねときて菊の露ひかし　　半臘

九日の阿をあやし菊の友かな　　日市 玉之

弥る鼓の一つさひし後の月　　中津川 含之

山を正面見て待ちほの月　　木吉 吉的

起して八握む炭火や後の月　　泊 焉今

六ケ村や三井の尾より鴫の声　加賀　啄吹
あら礒よ吾念せ桐の生嵐かな　雲枝
一たられ雪も小春の日よりかな　右今
物音もぬり埋かり夜の雪　ホリ山　紫石
足柄の山に音あり神むかひ　七尾　和荊
老の身や浪長娑ハぬさん炬燵　松宇
一株の水仙けむし二間床　千尺
初雪や小山をそれとつもりのに　山カタ　粟几

大つ雪の襦をぬらすまゝ習版　三帅
初雪や見つた梅の跡ごろし　吟志
初雪を寄て一時の花見かな　摂越女年　冬鶯
水際に鳥は舞ふや雪の鋼　加茂女年　貞治郎
絵まかけて隠してみて見れ雪の鷺　瑞翅
肩てもち省てもつ雪の耕哉　馬泉
去て鷺の工夫やたてぬるさの雪　トヤマ　湖白
八景のかすみや雪乃ひとつ松　一宇

一晴をまつや梧木もし雪の泊　摂越 佐源

こちらへも見よと志りまれや竹の雪　白椎

雪見舞ひ客来て寒しく戸口かな　槐二

懐の手に入峯乃雪見かな　七尾 也翠

我竹乃雪をかろめる雀かな　長良 仲志

味をまほしてけりや笠の雪　村雲 白舊

雪の日や素にあれなる人食小屋　嵐七

うす雪に化粧出るや黒木賣　楚石

あたまをます車端の横ゆくかな　器白

小春には帰る世話あり一の邑　弌志

魚ハ閑に鳥も小春の日和かな　可及

炭竈のあとも声に流れき哉　竹風

鼻を雉（かな）に雪吹てあるや横田川　山只

泊みの氷に拾ふき浪かな　一宇

有明の影に蓑笠の曲り哉　トヤマ 汐鳥

よくられし葛葉に雪の垣根代　但馬 李仲

かけぬまて尺取る事忘れけり　冬　井鮭

よとりきく外の藤さわや御ゆるさき　習阿

餅つきや巴山吹ちらし　濟鮭

節季候を仕舞て笑ふ女房かな　九鮒

華餅の上手ハいつも露の塔　巴静

餅よし隣の郷の暮れぬ　里紅

露柱菴之記

あらしかりそめに新涼の市をたちあれて多寶山の麓そとに一庵をむすひ貪利賤積のたをひをはなれ損友の煩ひなく心清ふして求めて身やすふしてもとむく不よおそふかくて消るを霞を浪に又まさ露をむすひて膝を入るゝよ

姿しとゝのふむかしの人乃志似とゝふ
色し衣を削をかくさ郭も似く
食を一鉢ちをまつはつて市門民家
のあまた志ろくは衣食住の三つなり
人の知足とをいふなきものはれそ
世の中乃節候三月も祭し乃
をぬきも潮は無めれ老もなされえ
語默進退ありしいましして　坊言

令色の憂名まも多てす御して調度
のさくりへもなされを留主は盗人の
氣つかひもなし山領の雲風も宵をは
そひへ住きなされハ柴門はをなきりて
雲衾草席の枕もひ出とをいふ記し
はれとむかしの儀ありて芋と栗を
をかくしおくふ例の風人はゆかし
出されし家ゟ生涯のをの数奇を

瓦らしむれとかのいもがしらに百貫の銭を費し　己が寺をも賣なして一生を終る法師もあれなとゆる庵は笑はれしは数に抱せしても憂世の苦此庵言されなとかりの住の名を欲すとて露住の二字をすて此庵に號せしに鑑亭主人が多の中より選二老師の護詞をかりて人篇を本篇にかゝる

より大名の名荘に名をあらひて露柱庵とハ見くするへし

主人僧

一字稿

餞別　其笠

越の方秋の知らぬ石にも迷ひなど
香さへ帰る山もあられぬを行くに
路用の貯もなきからこそみに薫山
乃花狂子をさそひて午時喫飯
に出立の粥服を試みに無事ある
の事をなすべし

花ましてと青葉やくる椿笠　鷺畊

其杖

むかしおもはするためしはあれど一時
一飯の施家へと参りたるおりとき

折春を拭ふ狸寝や放下　僧　慕竹

露柱法師の旅立ハ春もなきし
嵐色を都の其のむ衣に深き思の
帰庵をまつ

花散しに行ら編笠のまつりまへ　此柱

哀むまて柳を忘れし見られし分　葉園

野路やたち花にすれてや旅衣　雲枚

錫杖の音も通れや八重霞　可及
花鳥の情をはなすや雲の中　圃一
花はそふ人やかろき頭陀袋　有隣
涙をもついて送るや峠まて　始流
燕の宿主居見はけて讃出る　山市
水嚢に掛も楚国の柳の巻　竹鳳

留別

家をもて百韻一唱の餞進り候
をいへるに葦竹讃洲の南より
杖笠に百里の雲を見送て後
はれて連底のうきめもなく餘の
提重に豆腐に花のゑ義をいと
にも此場の坂送る身にも
おなけるき首途なるへし
花よりも国に帰や坂送て　一亨

又跋

百阿入道

【曇廬参廟】

集そてに成て半かしらと題又撰者ハ
越の彰浮乃山陰よとの寂し此法師
かり是幸しの友かりそめ子学浴の
談のを始とし江东游鳥の社門を
無見ら鶴風虎狂名をとつひ
との騒人の一唱林乞捧く

百句一吹の韻をみつしもそれを維
集れ葉と云咲きし也それハ大かた
半とらふ先さらの無く然ふあらね
ともあるもいつハ里雲もひ文ら
妹背狂中るお作狂哭てきき
婦まの交うつひよ是五備り
人狂狂ハあまたてやすの
まし乃法師と和きて結哭の

爰ハ要なりむされとあやうきハ山
法師ハ筆法の名すら露しらす
我ハ手習のやりかたすら所の
わらへハと文質のさかひを據柄
し再書その意を發もし也

享保丁未冬下九月

京寺町通柳小路上ル
當屋治兵衛板

222682